



佐伯美香 さん

6年(湊2区)

戦争中の学校では、やりで人を殺す勉強をしていたそうです。私はこのことにとっても驚きましたし、何だか恐ろしくなってきました。8月6日、武田さんが汽車を待つておられた時、ものすごい音と想像を絶する程大きくまぶしい火の玉が、小さな自分ののしかかってきたそうです。



就学旅行のたくさんの思い出の中で、私の心に一番残っているのは、広島で「語りべの会」の武田さんから被爆体験の話を聞いたことです。



終戦後今日まで農業一筋でやってきた。「昔の百姓は神様でした。米でなんでも買えたからねー。今では米を作ってはいけない時代だから」と寂しそう。これまで農協の生産部会(和牛・栗・キャベツ・タマネギ・ばれいしょ)の会長を経験。「牛が好きでずーっと飼っていた。多いときには11頭いた。でも歳をとって牛が恐くなって2年前やめた」と言う。「寂しいですねー。県の畜産共進会に親子の牛を連れていったこともある」と懐かしそうに話す。「牛を飼っていたころは朝早く起きて草を刈っていた。だから田の畦はいつもきれいに草が刈られていたよ」と。「今は6時半に起きてゆっくりしています。1日の仕事は稲の水管理と草刈りですよ」と話す。なるほど



原爆です。そのせいで姉さんを亡くされたこと、男女の区別がつかないくらい黒こげになった人々のことなどを泣きながら語られていました。私は、武田さんの話から戦争の恐ろしさと平和の尊さを学びました。そして、世界平和を願う人間になりたいと強く思いました。

ふるさとながと 39

こんにちは



吉津智章 さん (広島県廿日市市)

障害者も暮らしやすい街になってほしい

略歴

1971年仙崎で生まれる。現在、広島県廿日市市にある国立療養所原病院に入院中。

僕は22年間、長門市に住んでいました。小学1年の時に自分が筋ジストロフィーという病気であることがわかりました。仙崎小学校では、母に送迎を

してもらい、車椅子での学校生活では段差などがあり移動が大変でした。中学では普通校に行けず、宇部養護学校の萩分校に行きました。でも40分もかかり訪問教育になり、週2回の2時間しかなくほとんど勉強した気になれず残念でした。その分校は高等部がなく、中学で卒業。その後8年間あまり外には出ず、人とのコミュニケーションが苦手になりました。

そのうち体がしんどくなり、家で生活するのが難しく、広島県にある国立療養所原病院に入院しました。当初は不安で心細

く、泣きたいときもありました。それに言葉遣いになっていないとか、世間知らずとか言われ大変悔しい思いをしました。でもくじけず頑張りました。本当は、家で暮らしたかった。でも長門市には原病院のような施設もないし、学校もない。そういうところは遅れていると思います。障害者も楽に暮らせる、そういうことを期待したい。



入院当初の吉津さん